

## かたちの島田章三 たおやか島田鮎子

と

メナード美術館では、開館25周年を記念して、収蔵作品1400点のうち選り抜きの300点を5回に分けて、一年間にわたってご覧頂くこととなった。その第一回は現代日本と題して、戦後の60年に焦点を当てた。その中の一室に、ふたりの洋画家、島田章三と島田鮎子夫妻の金婚式を記念した特集展示がある。

このふたりは、メナード美術館に最も縁の深い作家であり、コレクションの数としては章三が一番多い。又、メナードでの個展も章三が二回、鮎子は一回開催している。ふたりは東京芸術大学で同級生として出会い、お互いに愛を育んで恩師の伊藤廉を仲人に結婚した。1962年12月3日のことである。伊藤は名古屋の出身であり、旧知の桑原愛知県知事に請われて新設の愛知県立芸大に赴任し、その時愛弟子の章三を伴つたのである。以来、

鮎子は、メナード美術館のリニューアルオープンを記念した個展に付けられた「たおやかな色と形」という副タイトルが、彼女の画境を充分表現し尽くしている。画面から音楽でも聞こえてくるように、ソフトでリリカルで、それでいてシンはしっかりと構成で裏付けられている、そんな画境である。表面は静かで穏やかだが、芯はしっかりとものを持っている彼女の柄がそのまま画面に現れているとも言える。又、包装紙など絵具以



30年近く住んだ自宅前にて 島田章三と島田鮎子

外のものを貼りつけるコラージュの技法を実際に効果的に魅力的に使いこなしているのも、知県在外研究員としてフランスに留学する。現地でキュビズムに親しく接した彼は、深い感銘を受け、キュビズムを日本に定着させることを生涯の仕事とする。以来自ら「かたちひと」と名付けたテーマを設けて力強く人や物のかたちを追求する。展示作品の中の『二人室内』に作者として寄せた一文には「かたちひとつとして物の形体を画面に叩き込むくらいしっかり仕事をした」と語っている。更に最新作『花に水』では、「生きる」ということを「何げない日常の一情景として造形したい」と語り、画面は少し優しい雰囲気になっている。

(メナード美術館顧問)

メナード美術館開館25周年記念  
コレクション名作展Ⅰ 現代日本1950—2012  
特集展示 島田章三と島田鮎子  
—ふたりで歩んだ50年—  
2013年2月17日まで開催